まえがき

２０２０年の春、僕は２５０㎡というだだっ広いコワーキングスペースの真ん中にぽつんと座っていた。見渡せば、そこには誰もいない。

外は静まりかえり、社会全体が「動くこと」自体をやめてしまったような不穏な空気が流れていました。コロナ禍、初めての緊急事態宣言。〝人と会うこと〟〝集まること〟が、まるで悪であるかのように語られた時代。あのときの光景を、僕はこれからもきっと忘れません。誰も

いない空間で、ただただ机や椅子を眺め、思い描いていた「未来の風景」とは違う現実をかみしめていました。

それでも僕は、この場所に〝希望〟を見いだしていました。なぜなら、コワーキングスペースという存在は、社会にとって、そして「誰か」にとって、確かに必要とされている。そう信じていたからです。

まだ到底「産業」とは呼べないものを〝創る〟ということ

コワーキングスペースを経営するということは〝産業を創る〟という営みにほかなりません。自動車や鉄道、家電やＩＴサービス、医療、銀行、百貨店、不動産……日本社会には数多くの「産業」があり、それぞれが人々の暮らしに必要不可欠なインフラとして、何十年、何百年も積み重ねられてきました。

コワーキングスペースは、まだその仲間入りを果たせてはいません。自宅でも、カフェでも、

今やリモートワークの設備があれば「働く場所」はどこにでも作れる時代です。実際、僕自身も家で仕事をできる環境は十分にあります。この事業を始める前は「コワーキングスペースが本当に社会のインフラになり得るのか？」と何度も自問自答しました。そして今でも「すべての人にとって、なくてはならないものだ」と断言することはできません。

けれど、5年間、この事業を続けてきてはっきりわかったことがあります。

それは、「ある人たちにとっては、コワーキングスペースは本当になくてはならない〝居場所〟になっている」ということです。

家でもない、職場でもない、〝サードプレイス〟として。

人と人が出会い、つながり、時には自分をさらけ出し、孤独や不安を抱えたままでも受け入れてもらえる、そんな場所。

コミュニティとしての「場」の価値

僕たちが提供しているのは「箱」ではありません。ただの「空間」や「時間」でもありませ

ん。GRANDSLAMが目指してきたのは〈運営者とお客様で構成するコミュニティ〉そのものです。

最初の1年、僕は「お客様」と「運営者」という線引きで、この場所をとらえていました。でも、やがて気づいたんです。この場所に集まる人たちは、いずれ「仲間」になっていく。イベントを一緒に企画したり、事業の喜びや失敗を共有したり、SNS上でもつながり合い、応援し合う。

コワーキングスペースは〝孤独な個人〟が〝つながる個人〟になるための、小さな社会インフラです。そして、その〝つながり〟は、時に思いがけない形で広がっていきます。

「あのとき、ここで出会った〇〇さん」

「前に同じイベントで名刺を交換した〇〇さん」

イベントや人、時間を超えて、コミュニティとコミュニティが重なり、拡張し、予想もしなかった化学反応を生み出すのです。

「産業を創る」という覚悟

僕がここまでやってこられたのは、間違いなく、たくさんの仲間のおかげです。この場所に集い、支え合い、ともに歩んできた人たちがいてくれたから、今がある。そして、その仲間たちは、最初から「顧客」だったわけではありません。「顧客」から「仲間」へ。

いつしか一緒にイベントを企画し、お互いの夢や課題を語り合い、ともに笑い、ともに悩み、時には叱咤激励し合う関係になりました。

コワーキングスペースは、そんな〝巻き込まれる場所〟でありたい。そして、応援され、応援し合う場所でありたい。

僕らが今いるフェーズは、まだ〝見えないトンネル〟の中かもしれません。経営の「セオリー」も「これをやれば必ずうまくいく！」なんてものは、正直、存在しない。でも、それが逆にエキサイティングで、挑戦しがいのある〝未完成な産業〟なのです。

僕たちは「ロールモデル」のような〝無難な成功〟を目指すのではなく、唯一無二のスペースを作りたい。それが、今ここで自分がこの場所に立つ意味であり、「産業を創る」ことの真の面白さだと信じています。

未来――コワーキングスペースは「新しいインフラ」になる

今、働き方も生き方も、かつてないほど多様化しています。会社に出勤することが当たり前だった時代は、もう戻ってこないかもしれません。テクノロジーの進化とともに、人と人が「リアルに集まる」ことの価値が、再び問い直されています。

その中で「コワーキングスペース」は、単なる〝仕事場〟や〝貸し会議室〟にとどまらない、新しい社会のインフラになり得ると、僕は本気で信じています。

なぜなら、人は〝つながり〟なしに生きてはいけないからです。孤独は思っている以上に大きな社会課題です。ＡＩやＤＸ、リモートワークがどれだけ発展しても、「リアルな場所での出会い」「コミュニティの温もり」は決して消えることがありません。

むしろ「リアル」と「オンライン」の境界が溶け合う時代だからこそ、コワーキングスペースの価値はますます大きくなっていく。僕たちは、場所や時間、イベント、ＳＮＳを通じて〝人と人がつながる〟ためのハブになっていきたい。ただ作業するだけの場所ではなく〝自分の人生や仕事が変わるきっかけ〟になる場所へ。１人では見えなかった「次のステージ」へ、コミュニティの力で背中を押せるような場所へ。

今この瞬間にも、全国のどこかで「新しい産業」を生み出そうとしている仲間がいる。その一人ひとりが、どんな困難の中でも前に進み続けている。僕はそんな「仲間たち」とともに、この日本で〝コワーキングスペース〟という産業が、本当の意味で「インフラ」として根付く日を夢見ています。

この本がその一助となることを心から願っています。そして、あなたがこの「場所とコミュニティの物語」に出会い、新しい一歩を踏み出すきっかけになることを心から祈っています。

2025年8月14日
コワーキングスペースGRANDSLAM
代表　吉永　亮